

エスニシティとは

「エスニシティ」という言葉が日常用語に定着して久しいが、語源的には「エスニック」という言葉の方が古い。「エスニック」が19世紀中頃に人種や民族に関することを示す形容詞として用いられ始めたのに対し、「エスニシティ」は20世紀中頃にエスニック集団の特性を意味する名詞として使われるようになった。これは、植民地において異なる民族が出会い、混血化によって「人種」概念が解体されたこと、その後の脱植民地化の過程でそれぞれの民族集団が自分達の文化的独自性を主張し始めたことと無関係ではないだろう。

「ナショナリティ (国民性)」が国民の性質を意味するように、「エスニシティ」は、本来、エスニック集団の特性を意味するはずであった。人類学では、エスニシティは1970年代に最も頻繁に研究されたテーマの1つであり、理論的な発展も認められる。しかし、その定義や用語法が曖昧なまま用いられる傾向があった。例えば、エスニシティとエスニック・アイデンティティを概念上しっかりと区別して使い分けしている研究は意外と少ない。エスニシティの理論的研究では、エスニック・アイデンティティの形成に焦点が当てられる一方で、習慣や行動様式といった集団特性の中でも目に見える要素はそれほど注意を払われなかったと言って良い。

また、「エスニシティ」は実体化され、会社や学校といった実際に存在する集団のように扱われる傾向がある。そのため、この用語はしばしばエスニック集団と同じ意味で用いられ、日常用語としても「人種」や「民族」などの類似概念と厳密に区別されず使われることが多い。だから、米国で「あなたのエスニシティは何ですか」と尋ねられれば、例えば「日系人です」と答えるのであって、日系人の特性について長々と説明したりしないのである。ただ、日本人留学生がエスニシティについて尋ねられると、少々やっかいだ。「日本人ですが、ナショナリティ (国籍) も日本です」とか「日本から来た日本人です」とやや回りくどい説明をするか、「日系日本人です。日系アメリカ人ではありません」とウケを狙うかのいずれかだろう。

「エスニシティ」は、人類学や社会学の研究においてさえ、エスニック・アイデンティティやエスニック集団などと明確に区別されることなく用いられて来た。そのため、概念としての重要性を失ってしまった。だが、かつてのエスニシティ研究で培われた理論は、現在の文化アイデンティティの研究にとって依然として有効であるのも事実である。ハワイ人とキリスト教の関係について考察する時、ハワイ人のアイデンティティの形成について考えねばならないが、エスニシティについての理論は、その際に有効な視点を提供してくれるのである。

構築されるアイデンティティ

エスニック集団とは社会の中の一集団であり歴史と文化を共有する人々であると、集団の本質的な特性に基づき定義づけることはできる。確かに、共通の祖先を持ち、似たような容顔で、同じ言葉を話し、同じ習慣を保持し、植民地化や移住の記憶を共有する人達が、エスニック集団と見なされることが多いはずだ。しかし、エスニシティ研究で重視されたのは、そのようなエスニック集団の属性よりも、「われわれ意識」、すなわちエス

ニック・アイデンティティがどのように構築されるのかという点であった。客観的に測定できる集団の属性よりも、集団レベルでの自己同定の力学が、エスニシティ研究において重要なテーマであったのである。

エスニック・アイデンティティは、内在的な自己同定と外在的な類別化との関係性の中で構築される。自ら何者であるか表明する「名乗り」と他者から何者であるか分類される「名付け」との相互作用を通して構築されるのがエスニック・アイデンティティなのである。「われわれ意識」を共有するということは、「我々」と「彼ら」を二分すること (we/they dichotomy) であるが、その境界は状況に応じて柔軟に維持される。いずれにせよ、エスニック集団が形成されるためには、同じ社会的地平で“他者”が存在しなければならない。

多民族社会の中のハワイ人

多民族社会であるハワイは、エスニシティ研究にとって格好のフィールドである。ハワイには、ハワイ人、ハオレ (白人系)、ポルトガル系、中国系、日系、沖縄系、韓国系、フィリピン系、サモア系、トンガ系、ベトナム系など、多くのエスニック集団が生活している。ハオレとポルトガル系、日系と沖縄系 (Okinawan : 沖縄人!) が異なるエスニック集団を形成しているのは、日本人の感覚からすると不思議に思うかもしれない。だが、その境界は確かに存在する。

コメディアンフランク・デ・リマが、「バックプリントのアロハシャツを着たシャイな会計士」であるグレン・ミヤシロという架空の日系人キャラクターのパロディソングを発表したことがある。その時に、沖縄系の人が問題にしたのは、そのエスニック・ジョークの中身ではなく、ミヤシロが沖縄系の苗字であるということだった。日系と沖縄系を混同しないほしいという主張である。

連邦政府のセンサスでは、かつてはアジア系と太平洋島嶼民は同じカテゴリー (Asians or Pacific Islanders) に分類され、ハワイ人もその中に含まれていた。米国本土から見れば、アジア系もハワイ人も海の向こうからやって来たモンゴロイドで大差ないのかもしれないが、ハワイに住むハワイ人にとっては由々しき事態であった。「私達がアメリカに来たのではない。アメリカが私達の所に来たのだ」という意見は、ハワイ人は移民でないという点でアジア系の人々等とは決定的に異なるという強烈な主張である。

中国系、日系、韓国系の人々がアジア系アメリカ人というエスニック集団に一括りにされるように、ハワイ人もサモア系やトンガ系の人々と同じ太平洋島嶼民というエスニック集団に分類されることがある。エスニシティは、状況に応じて、様々なレベルで境界線を引き直されるのである。だが、太平洋島嶼民という分類も、先住民のアイデンティティを持つハワイ人にとって納得の行くものではない。ハワイ人のアイデンティティについて考えるのであれば、エスニシティやエスニック・アイデンティティではなく、文化アイデンティティという言葉積極的に使って行った方が良いだろう。それは、また、エスニシティ研究で培われた理論をアイデンティティ研究全般の理論へと発展させることにもなる。